

## 第1章 調査に至る経緯と経過

一般国道431号は、出雲市を起点として、松江市・鳥取県境港市を経て米子市に至る総延長95.8kmの道路であり、主として宍道湖・中海の北岸に沿って併走することから、地元では通称「湖北線」と呼称されている出雲部の大動脈である。一般国道431号東林木バイパスは、宍道湖・中海北岸の市町を連結する地域高規格道路「境港・出雲道路」の一部を構成する。現道の線形不良及び交通混雑の解消を目的とし、出雲市矢尾町から出雲市東林木町に至る延長4.2kmの4車線及び副道・歩道両側設置する計画であり、平成10年12月に地域高規格道路の整備計画に組み込まれた道路である。副道は、東林木町内において平成16年度より一部の供用が開始されている。

島根県教育委員会では、平成11年度に出雲土木建築事務所（現：出雲県土整備事務所）から遺跡有無の照会を受け、平成12年3月に事業予定地内の分布調査を実施し、予定地内において青木遺跡、馬渡り遺跡、山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の5遺跡を発見するとともに、遺跡の取り扱いについて協議が必要な旨を回答した。その後、島根県土木部道路建設課及び出雲土木建築事務所との協議を経て、平成12年5月22日付で出雲土木建築事務所長名で、文化財保護法第57条の3（現第94条）に基づいて、上記4遺跡地内における土木工事の通知が島根県教育委員会教育長に対して行われ、島根県教育委員会では同年5月29日付で工事着手前に発掘調査が必要な旨を回答した。

上記の法的手続きを基づいて、島根県教育委員会は平成15年12月～平成16年1月に山持遺跡、里方本郷遺跡、下澤遺跡の試掘確認調査を実施した。下澤遺跡では事業予定地内に20ヶ所のトレンチを設定し、遺構・遺物の有無について確認を行ったところ、国道431号に隣接するトレンチで砂礫層から須恵器・土師器がまとまって出土した。この試掘結果を踏まえ、現道寄りの730mで事前調査が必要となり、事業者と協議を行い本調査を実施することとした。

平成23年5月11日付で島根県埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて文化財保護法第99条第1項にかかる発掘通知（以下、発掘通知）を提出した。現地調査は5月24日から開始した。調査担当者は島根県埋蔵文化財調査センター 热田貴保である。現地調査は11月18日に終了し、平成24年3月21日に島根県土木部道路建設課長あて終了報告を提出した。

下澤遺跡の現地は発掘調査終了後、道路建設工事が隨時着手されており、平成26年3月に暫定2車線で供用が開始される予定である。

## 第2章 下澤遺跡の位置と歴史的環境

下澤遺跡は出雲平野の北端、出雲市矢尾町に所在する。出雲平野は斐伊川・神戸川の二大河川により形成された沖積平野であり、南から北へ徐々に標高が低くなり、急峻な断層山脈である北山山系に至っている。すなわち、当遺跡の位置する北山南麓は出雲平野で最も標高の低い場所の一つであり、斐伊川や北山山系から流れ出る中小河川の影響を不斷に受け続けた地域であった。天平5(733)年に編纂された『出雲國風土記』では当遺跡周辺は出雲郡伊努郷に相当する。『風土記』には、国引きを行った意美豆努命の子である赤衣伊努意保須美比古佐委氣能命の社が郷内にあることが郷名の由来として記載されている。赤衣伊努意保須美比古佐委氣能命は「意保須美」＝「大洲見」から沖積地守護の神と想定されており(加藤 1957)、当地が古來より水との戦いを強いられてきた地域であることを雄弁に物語る記述と言えよう。当地域周辺の遺跡の動向は、こうした出雲平野の形成過程と切り離して考えることはできない。以下、各時代の歴史的環境について若干ふれておく。

**縄文時代** 旧石器時代の遺跡は出雲平野西端の砂原遺跡において三瓶火山灰層に挟まれた土層中から石器と思われる石が出土し、日本最古の遺跡ではないかと注目されている。縄文時代早期になると菱根遺跡や上長浜貝塚などの遺跡が確認されるようになる。特に前者は当遺跡と同様な北山南麓に位置する遺跡で、「菱根式」と呼ばれる、当地域における早期末の織維土器の模式遺跡として著名である。出雲平野中央部に位置する矢野遺跡では縄文後期後葉の福田KⅢ式・元住吉山Ⅱ式が採集されている(池田・足立 1987)。神戸川の上流域に位置する三瓶山は約3600～3700年前頃に第VII期活動期と呼ばれる活発な噴火活動があり、当該期にこの活動に伴う大量の噴出物が出雲平野に流出・堆積したと想定されており(角田 2004)、矢野遺跡でも当活動期の堆積物が確認されている(大西ほか 1989)。続く縄文時代晩期には矢野遺跡のほか蔵小路西遺跡で突堤文期の火跡が確認されている(島根県 1999)。このように縄文時代晩期までには出雲平野中央部までは確実に陸地化していたものと考えられる。北山南麓ではまだ確実な当該期の遺跡は確認されていないが、山持遺跡では各時期の縄文土器がある程度出土していることから、遺跡周辺の北山南麓縁辺部等に遺跡が所在する可能性が考えられる。ただ、遺跡周辺の平野部では縄文晩期段階までは安定した陸地が形成されていた可能性は低いと推測される。



第1図 下澤遺跡の位置

**弥生時代** 出雲平野における弥生時代前期の遺跡としては、原山遺跡、矢野遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などがある。原山遺跡では前期の配石墓が確認されており、出雲部における砂丘立地の弥生初期墓制として注目される（村上・川原 1979）。当地域周辺で明確な遺跡が確認されるようになるのは弥生中期中葉段階であり、山特遺跡でもこの段階から不安定ながら集落が営まれつつあったと考えられる。出雲平野全体ではこの時期（弥生時代中期中葉）に爆発的に遺跡数が増加することが指摘されており（藤永 2005、米田 2006）、北山東南麓の集落の動向もこうした様相と軌を一にしたものと



- 1 下澤遺跡
- 2 青木遺跡
- 3 山持遺跡
- 4 里方本郷遺跡
- 5 大寺古墳群
- 6 平林寺山古墳群
- 7 脇棚山古墳群
- 8 古前西北崖上横穴墓
- 9 古前背後横穴墓群
- 10 伞屋背後横穴墓群
- 11 大寺三歳遺跡
- 12 燕ヶ城跡
- 13 東組遺跡
- 14 龍善寺東遺跡
- 15 門前遺跡
- 16 矢尾横穴墓群
- 17 里方別所遺跡
- 18 高浜Ⅰ遺跡
- 19 里方八石原遺跡
- 20 高浜Ⅱ遺跡
- 21 高岡遺跡
- 22 萩谷Ⅱ遺跡
- 23 中野西遺跡
- 24 中野美保遺跡
- 25 中野清水遺跡
- 26 大津町北遺跡
- 27 大塚遺跡
- 28 矢野遺跡
- 29 小山遺跡第3地点
- 30 井原遺跡
- 31 白枝荒神遺跡
- 32 小畑遺跡
- 33 渡橋沖遺跡
- 34 小山遺跡第1地点
- 35 蔵小路西遺跡
- 36 姫原西遺跡
- 37 白枝本郷遺跡
- 38 余小路遺跡
- 39 壱丁田遺跡
- 40 天神遺跡
- 41 海上遺跡
- 42 高西遺跡
- 43 藤ヶ森遺跡
- 44 角田遺跡
- 45 球山古墳
- 46 大念寺古墳
- 47 上塙治榮山古墳
- 48 上塙治地藏山古墳
- 49 半分古墳
- 50 三田谷Ⅰ遺跡
- 51 光明寺古墳群
- 52 上塙治横穴墓群
- 53 菅沢遺跡
- 54 長者原廃寺
- 55 西谷墳墓群
- 56 長廻遺跡
- 57 豊伊川鉄橋遺跡
- 58 古志本郷遺跡
- 59 田畠遺跡
- 60 下古志遺跡
- 61 妙蓮寺山古墳
- 62 宝塚古墳
- 63 知井宮多間院遺跡
- 64 上長浜貝塚
- 65 菱根遺跡
- 66 原山遺跡
- 67 南原遺跡
- 68 中分貝塚
- 69 鹿藏山遺跡
- 70 五反配遺跡
- 71 真名井神社附近出土地
- 72 出雲大社境内遺跡

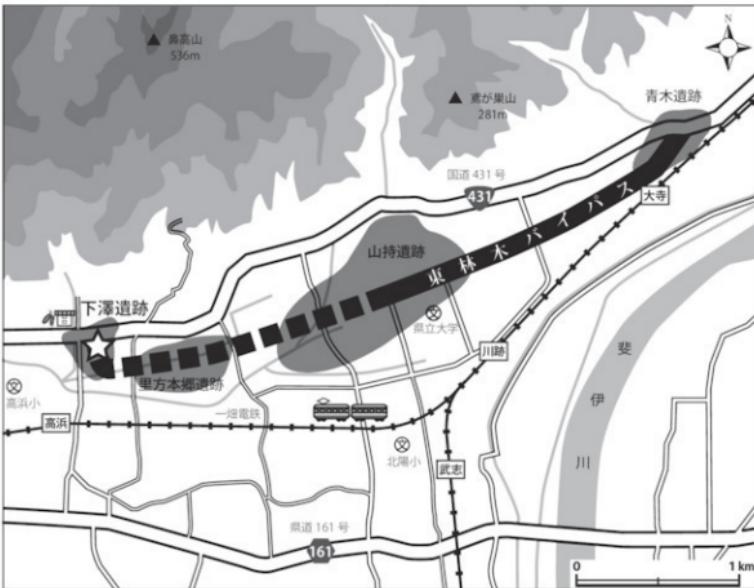
第2図 下澤遺跡の位置と周辺の主な遺跡

理解される。

出雲平野における弥生時代中期の集落としては、前述の遺跡のほか、天神遺跡、古志本郷遺跡、白枝荒神遺跡、中野美保遺跡、知井宮多門院遺跡などが比較的大規模なものとしてよく知られている。中野美保遺跡では中期中葉に属する方形貼石墓が1基確認されており、後期以降当地で盛行する四隅突出型墳丘墓の系譜を探る上で注目される遺跡である（島根県2004a）。

弥生時代後期は中期後半から形成された集落の多くが継続して営まれ、かつ遺物量が格段に増加し、後期末から古墳時代前期前半にそのピークを迎える。山持遺跡では楽浪土器や三韓土器といった朝鮮半島系遺物や北部九州系土器が後期にも認められ、吉備系特殊土器及びその模倣品が西谷墳墓群や矢野遺跡、山持遺跡などで存在するなど、広汎かつ多様な地域間交流の様相を窺い知ることができる。墳墓遺跡では西谷丘陵で最大級の四隅突出型墳丘墓群が営まれるほか（島根大学1992）、平野部の青木遺跡や中野美保遺跡などで中小規模の四隅突出型墳丘墓が営まれている状況が明らかとなりつつある。

**古墳時代** 出雲平野の地域社会が大きな変化を見せるのは古墳時代前期である。從来から指摘されているとおり（渡辺1986）、当地域においては西谷9号墓に後続する前期前半の有力首長墓が現状では確認できない状況にある。前期古墳としては、山地古墳、大寺1号墳、浅柄II古墳などがあるが、いずれも前期後葉（集成編年3期以降）に降るものである。一方、集落遺跡は、從来は古墳時代前期になると減少すると理解されていたが、古志本郷遺跡や中野清水遺跡のように前期中葉頃まで継続的に集落が営まれる事例も存在する。



第3図 東林木バイパス工事に伴って調査された遺跡

古墳時代中期の様相は不明な点が多い。平野南西部の北光寺古墳は全長約70mの中期前～中葉の前方後円墳で、同時期としては出雲部最大の古墳であり、その突発的な出現の背景は出雲平野の地域史を再構成する上で大きな課題として残されている（島根県古代文化センター 2007）。

古墳時代後期になると、大念寺古墳、上塙治築山古墳など、大型の横穴式石室をもつ古墳が相次いで築かれ、山代二子塚古墳、山代方墳に代表される出雲東部勢力と拮抗関係にあった出雲西部の大首長の奥津城と理解されている（渡辺 1986）。こうした大型古墳の築造が停止されるのとほぼ同時に平野南部の丘陵には上塙治横穴墓群や神門横穴墓群などの大規模な横穴墓群が営まれる。当遺跡周辺では、金銅装馬具をはじめとする豊富な副葬品が一括出土した上島古墳（宮代 1997）、大型の横穴式石室を備える中村1号墳（出雲市 2012）、横穴式石室を主体部とする後期群集墳である定岡谷古墳群の存在が注目される。

**古代** 奈良時代の出雲平野は斐伊川を境に西の神門郡と東の出雲郡に二分される。近年の発掘調査により、神門郡家は出雲市古志本郷遺跡（島根県 2003）が、出雲郡家の関連施設として斐川町後谷遺跡（斐川町 1996）が比定されているが、その他に神門郡内では天神遺跡、三田谷1遺跡、小山遺跡が官衙関連遺跡である可能性が指摘されている。冒頭に述べたとおり、当遺跡は出雲郡伊努郷に所在するが、多量の墨書き器・木簡の出土した青木遺跡を出雲郡家の出先機関の機能が存在する場所と評価する見方もある（佐藤 2003）。寺院跡では、古くから知られている神門寺境内廃寺、長者原廃寺のほか、青木遺跡の奈良時代I区建物跡群を寺院跡とみる見方もある（内田 2006）。山持遺跡では10～11世紀の地割が発見され、未解明であった古代出雲平野の条里遺構の一端が確認された（島根県 2012）。

**中世** 中世の遺跡としては、歳小路西遺跡で検出された居館跡があげられる。これは一町四方の大溝に囲まれた中に多数の建物を配置する方形居館跡で、12世紀後半から15世紀にかけてのものと考えられ、朝山氏または塩治氏の居館である可能性が指摘されている（島根県 1999）。また15～16世紀頃の居館跡と考えられる高浜I遺跡からは、国内最古の将棋盤が出土している（島根県 2011）。当遺跡周辺では、青磁の優品を出土した荻原古墓（近藤 1969）、多数の掘立柱建物跡、井戸が検出された青木遺跡があげられる。特に後者は皇室の荘園として九条家文書に記載のある林木莊との関連が注目される（島根県 2004b）。また、当遺跡のすぐ北に屹立する丘陵上には戦国時代に市内最大規模の山城である鳴ヶ池城が築かれ、尼子氏復興戦の際に毛利氏による高瀬城攻略拠点となったことで著名である。

#### 参考文献

- 加藤義成 1957 『出雲國風土記参究』今井書店  
近藤 正 1969 「出雲市荻原発見の骨蔵器について」『考古学雑誌』第54巻3号  
村上勇・川原和人 1979 「出雲・原山遺跡の再検討」『島根県立博物館調査報告』第2冊  
渡辺貞幸 1986 「古代出雲の榮光と挫折」『王權の争奪』集英社  
池田満雄・足立克己 1987 「出雲市矢野遺跡出土の圓文土器」『島根考古学会誌』第4集  
大西都夫ほか 1989 「出雲平野西部の形成過程」『古代出雲文化の展開に関する総合的研究』島根大学山陰地域総合研究センター  
島根大学法文学部考古学研究室 1992 「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」  
斐川町教育委員会 1996 『後谷V遺跡』  
宮代栄一 1997 「島根県上島古墳の再検討」『島根考古学会誌』第14集  
島根県教育委員会 1999 「歳小路西遺跡」

- 鳥根県教育委員会 2003 『古志本郷遺跡V』
- 佐藤信 2003 「出土文字資料が語るあたらしい古代史像」『出土文字資料が語る古代の出雲平野 平成15年度鳥根県埋蔵文化財調査センター講演会資料』鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 角田徳幸 2004 「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『鳥根考古学会誌』第20・21集
- 鳥根県教育委員会 2004a 『中野美保遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2004b 『青木遺跡(中近世編)』
- 藤永照隆 2005 「遺跡の分布からみた出雲平野の古地理再考」『八雲立つ風土記の丘館報』No.182
- 米田美江子 2006 「遺跡分布から見た出雲平野の形成史」『鳥根考古学会誌』第23集
- 内田博雄 2006 「出雲の神社遺構と神祇制度」『古代の信仰と社会』 国立館大学考古学会
- 鳥根県古代文化研究センター 2007 『北光寺古墳発掘調査報告書』
- 鳥根県教育委員会 2011 『高浜1遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2012 『山持遺跡 Vol.8(6,7区)』
- 出雲市教育委員会 2012 『中村1号墳』

## 第3章 調査の概要と経過

### 第1節 調査の方法

**調査グリッドの設定** 調査にあたり、世界測地系の第III座標系に基づく任意の点(X = -66870, Y = 52850)を基点として座標軸を合わせた10m四方のグリッドを設定し、基点から東へA・B・C・D、南へ0・1・2・3・4・5として、北西交点をグリッド名として遺物をグリッドごとに取り上げた。

**表土掘削** 調査予定地の現況は水田跡であり、旧水田等の除去はバケットに平爪を装着したバックフォーを用いて実施した。掘削は、近世以降の水田層や造成土及び古代末から中世にかけての腐植土層(オモカス)を除去し、試掘で確認されていた砂礫層上面まで行った。

**遺物包含層掘削と遺構の精査** 遺物包含層については、主として鍬、スコップを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所は草削りや移植ゴテで掘り下げた。遺構検出では、遺構面を草削りで丁寧に削って精査した。

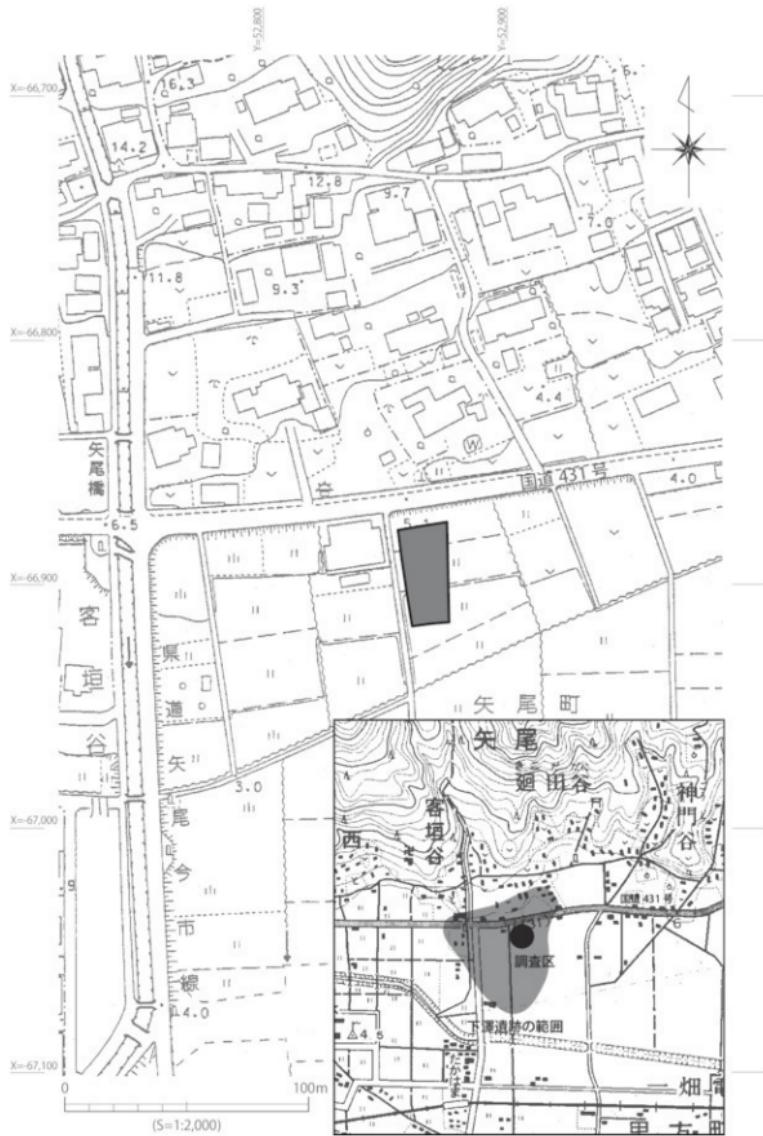
**記録の作成** 遺構の平面図は、コンピュータ・システム株式会社の遺跡調査システム「SITE」を用いて測量し、出力後補正を行った。土層断面図は1/20の縮尺で実測を行った。報告書掲載が見込まれる遺物は遺跡調査システムで出土位置を記録し、取り上げた。

遺構の写真は、原則として同一カットをフィルムカメラとデジタルカメラの両方で撮影を行い、前者を保存用、後者を報告書掲載データとして使用した。フィルム撮影は4×5判、6×7判(白黒、カラーポジ)のほか35mm(白黒)で撮影した。

**整理作業・報告書作成** 本格的な整理作業は平成24年4月から実施した。遺物の実測等を行ったうえで、報告書作成はDTP方式で行った。遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工などはAdobe社製Illustrator CS5、Adobe社製Photoshop CS5を用いた。遺構写真は、一部でフィルムをスキャニングしたほかは、RAW撮影したデータを現像し、RGBデータからPhotoshopで色調補正により白黒化して、階調、コントラストの調整をおこない掲載した。特に土層断面写真については層位区分ができるだけ判別できるようカラーデータを参考に調整を行った。遺物写真もデジタルカメラで撮影した後、遺構写真と同様にRGBデータから処理を行っている。最終的な原稿執筆、編集作業はAdobe社製InDesign CS4を用いて行った。



第4図 調査区地区割り図

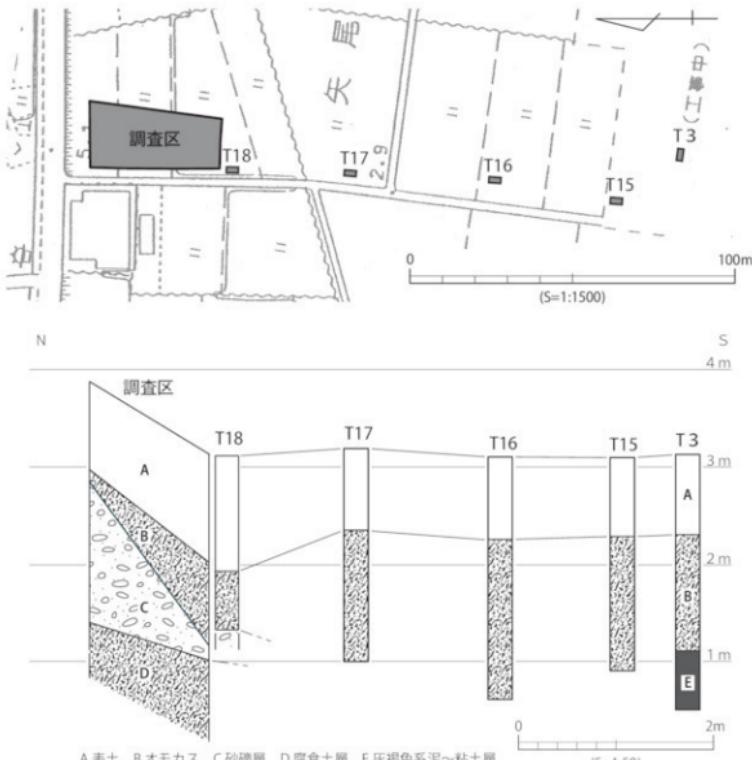


第5図 遺跡の位置と調査区配置図

## 第2節 調査区

調査場所は出雲市矢尾町の客垣谷扇状地に位置し、客垣谷川に沿って延びる県道矢尾今市線と国道431号が交差する矢尾橋から西に120mの地点にある(第5図)。試掘によって地表下1.4~2.4mの間の砂礫層に遺物が含まれることが確認され、この層の広がる範囲を本調査の対象とした。調査区の設定にあたっては、隣接する国道路面と掘削深度の比高差等を考慮し、事業地の730mを対象として調査を実施した。

調査開始前の現況は旧水田で、田面の標高は調査区北側で3.8m、南側で3.1mで、北から南に緩やかに下がっていた。客垣谷扇状地は圃場整備や住宅建設により元の地形がかなり不明確になつてはいるが(図版1、2)、現在でもその名残は確認できる。国道431号は北から南に広がる扇状地を東西に横切り、客垣谷川と交差する地点で最も高くなつていて、国道北側に集落が形成されている。空中写真(図版3-2)と地形図(第5図)から、調査地点の地形的な位置関係を確認すると、扇状地の西側に片寄った位置でほぼ南北に延びる客垣谷川に対し、左岸側では谷出口の方向を反映し



第6図 土層模式図

て耕地や宅地の区画がやや西に振れており、調査地は扇状地の中央前面に位置していることがわかる。

斐伊川は現在宍道湖に流れ込むが、近世以前には西進し日本海に流れ出ており、空中写真を見ると扇状地前面に広がる水田の区画に蛇行しながら西流する幾筋かの旧河道が確認できる（図版1～3）。下澤遺跡から山持遺跡付近では、蛇行して西進する旧斐伊川の自然堤防と北山の間に後背湿地が形成され、北に低い出雲平野でも水はけの悪い環境が続き、地元で「オモカス」と呼ばれる低位泥炭が形成された。この低位泥炭は主にアシやスゲなどの植物遺体からなり、堆積環境は水深の浅い湿地であったと考えられている<sup>10)</sup>。試掘結果においても遺跡の南側T3、T15～17の標高1～2m付近で「オモカス」が堆積し、本調査区の下底でも同質の粘質土を確認している（第6図）。砂礫層はこの未分解の腐植土の間に堆積しており、北山山塊由来の礫が客垣谷川の氾濫によって前面の湿地に向け吐き出され、扇状地を発達させたことが窺える。

### 第3節 基本層序

調査区の基本層序は4つに大別される（第6図）。A層は中世以降に堆積した土層で、砂混じりの粘質土を基調としていることから、水田耕作土と考えられる。調査区東壁では噴砂を確認した（写真図版6-1）。東壁北端から南に約18mの範囲にわたっており、下層のC層から上位の上層に向か細砂が貫通していた（第7図）。A層は重機によって掘削したため噴砂の時期を特定することはできなかったが、噴砂を伴う規模の地震の痕跡として注目される。B層は「オモカス」と呼ばれる未分解の植物質が堆積した暗茶褐色の腐植土層である。東林木バイパス事業の他の遺跡調査でも同様の層が認められ、堆積時期は中世頃と推定される。C層は砂礫と粘質土の互層堆積で、奈良時代の水田遺構とそれを被覆する砂礫である。D層は暗茶褐色粘質土で植物質を多く含むがB層より分解が進んでいる。後述する下層水田面はこのD層上面に相当する。この上層からは古墳時代の土師器が1点出土した。さらに下層の様子を確認するため調査区側溝で海拔0mまで掘削し、また花粉分析に伴う簡易型ジオスライサーにより海拔マイナス1mまで試料を採取しているが同様の褐色系の腐植土層が堆積していた。

### 第4節 調査経過

調査は平成23年5月24日から表土掘削を開始し、調査区外周の養生及び安全通路を設置し、6月8日から砂礫層の掘り下げを開始した。6月21日に調査区北西側で砂礫層の下面で珪を検出、水田跡の存在を確認した。同29日には調査区東側でも水田面を検出した。その後調査区北東隅で先行して掘り下げを行ったところ9月6日に上層水田跡とは区画の異なる下層水田を確認した。上層水田跡を記録後に下位の砂礫層を掘り下げたところ10月3日に中層水田跡を確認した。その後調査区全面で下層水田跡を検出し、11月18日に調査を終了した。なお、8月30日、11月18日に島根県文化財保護審議会委員田中義昭氏から、9月7日に出雲市文化環境部学芸調整官花谷浩氏から調査指導を受けた。また9月17日に現地説明会を開催し、約50名が参加した。

(1) 池淵俊一・渡辺正巳 2007 「里方本郷遺跡から山持遺跡にかけて分布する「オモカス層」について」『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区』 Vol.2 島根県教育委員会

## 第4章 水田跡の調査

### 第1節 土層堆積状況

前章で大別した基本層序のうち水田跡の土層堆積状況について説明する。水田に関わる土層は大別したC層とD層上面が相当し、以下、水田作土とそれを被覆する砂礫の関係を、上層水田跡の覆土(Ⅰ層)、上層水田作土(Ⅱ層)、中層水田覆土(Ⅲ層)、中層水田作土(Ⅳ層)、下層水田覆土(Ⅴ層)、下層水田作土(Ⅵ層)に整理して説明する(第7～9図 図版5、8)。

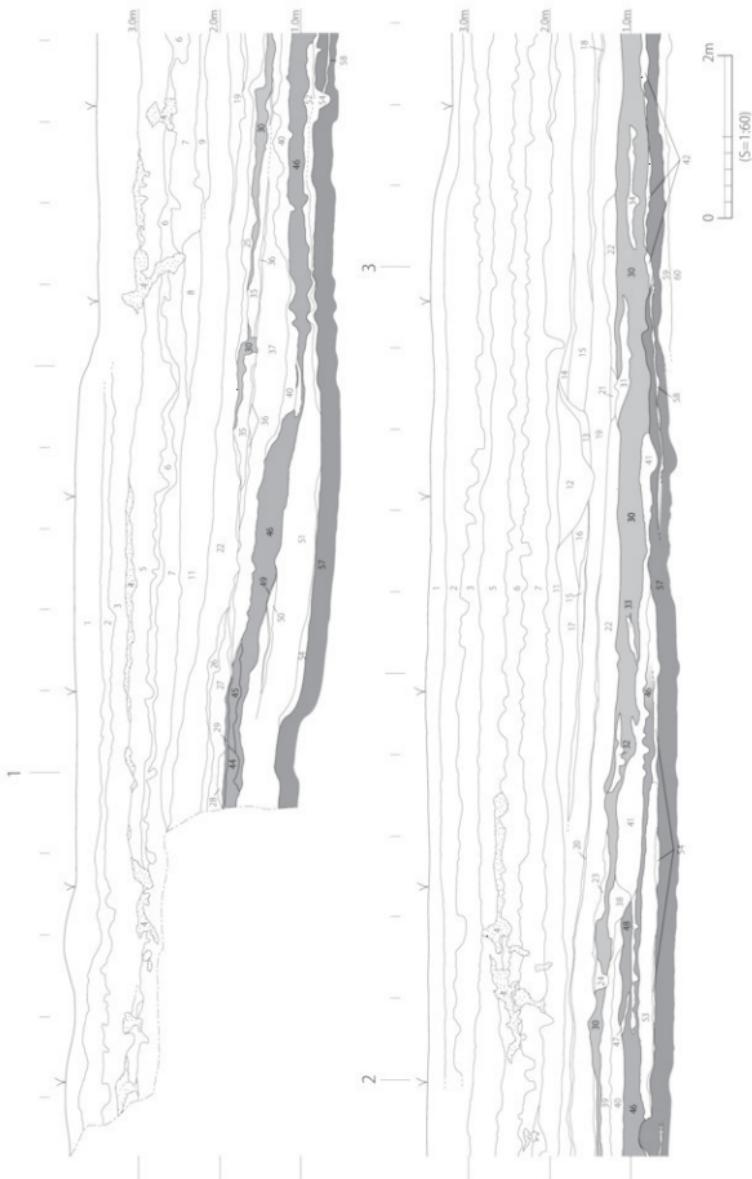
I層はこぶし大の礫を多く含む砂礫層で、上層水田跡を覆うように堆積している。調査区西壁の5層(第9図 図版9-1)では礫の大きさが北側が大きく南に向かって粒が小さくなっている。谷上流側からの急激な土石流で堆積した状況を示している。被覆する砂礫と上層水田作土との間には青灰色砂(第9図6層)、黄褐色シルト(同7層)が薄く堆積しており、土石流が水田を覆う以前に水流の影響が徐々に始まっていたことが想定される。II層は水田作土で、砂混じりの粘質土を基調とする。南西側の一部で小規模な砂礫層の堆積(第9図10層)に伴い耕作面の作り替えが行われており、砂礫を完全に除去せず削りだして新たな畦畔として利用している状況が確認できた(図版16-1、2)。III層は中層水田を覆う砂礫層で、I層より礫の量が多く、調査区北西側では10cm程度の礫が集中していた(図版12)。IV層は中層水田作土で、III層によって大きく削られており、調査区北東側で部分的な検出にとどまった。V層は下層水田作土を覆う砂礫層で、調査区北側に厚く堆積し南半に向けて薄くなる。礫は比較的大きいものが目立つ。VI層は下層水田作土で、下位に厚く堆積する暗茶褐色の腐植土を基盤に形成された水田面である。耕作によって攪拌され、土壤中には微細な砂が多く含まれている。調査区南東側はV層が不明確で、上層水田作土との分離は十分にはできていない(図版7-2)。

### 第2節 上層水田跡

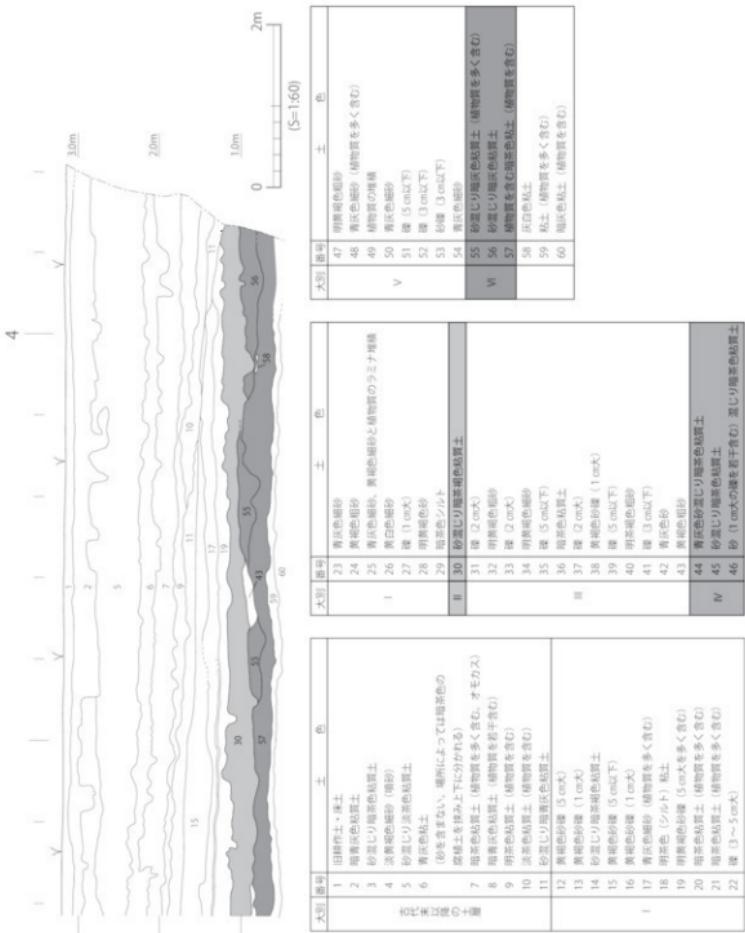
砂礫のI層を除去して検出した水田遺構である(第10図)。水田の区画はa～nの14枚を確認した。Aライン付近から北側は東西に3列、それより南側は東西2列に配置されている。北側は礫層によって削られ、南側は被覆する礫層が不明瞭であったため畦畔を検出できなかった。区画d、e、fでは薄い砂礫層を挟み田面が作り替えられていた。図示したのはI層除去後の上層水田の最終形態である。

水田区画の形態はa、b、d、e、iが矩形で、c、j、kは変則的な多角形を呈する。規模は、区画が判明する西側で見ると、aが南北4.2m、東西約4m、bが南北2.7m、東西3.3mで面積9.3m<sup>2</sup>、cが南北7.9m、東西5.1mで約30m<sup>2</sup>、dが南北2.6m、東西4.6mで面積11.9m<sup>2</sup>、eが南北2.8m、東西4.3m、面積11.7m<sup>2</sup>である。調査区全体では10m前後の規模と3～40mの規模の水田が混在している状況である。田面中央部の標高は、西側a:1.75m、b:1.65m、c:1.55m、d:1.45m、e:1.35m、東側i:1.60m、j:1.40m、k:1.30m、l:1.25m、m:1.10m、n:1.10mで、北から南に向け約10cmの比高差で緩やかに下降する。北側中央の水田区画g、hの田面が不明確だが、東西方向の高さを比較すると西に比べ東列が低い。

畦畔は作土と同様の砂混じりの粘質土で、下幅50cm前後、高さ10～15cmで、断面形は台形～半円形である(図版9-2、13-3)。部分的な土砂の流入により田面が作り替えられた南西側では、



第7図 調査区東壁土層図(1)

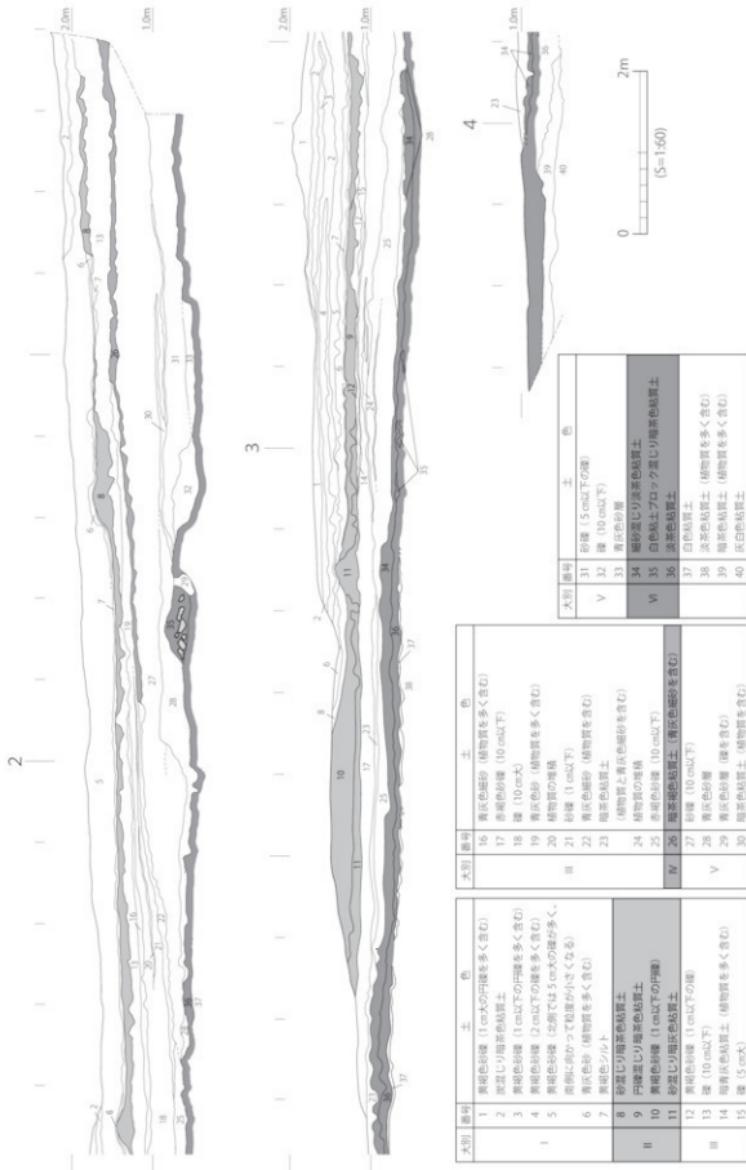


第8図 調査区東壁土層図(2)

区画c・d間の畦畔が直前に堆積した砂礫層を削り出して作られていた(図版13-1, 2)。

水口を2カ所で確認した。水田区画aとbの間の水口1は両者を隔てる畦畔のほぼ中央で途切れるように開口している。水口前後の比高差は約5cmで、水田区画aからbに導水されていたと考えられる。水田区画hとjの間の水口2(図版16-2)は、多角形を呈する水田区画jの南西隅が途切れる形で開口し、開口部両側の畦幅はやや広くなっている。田面の比高差は約5cmで水田区画hからjに導水したと考えられる。

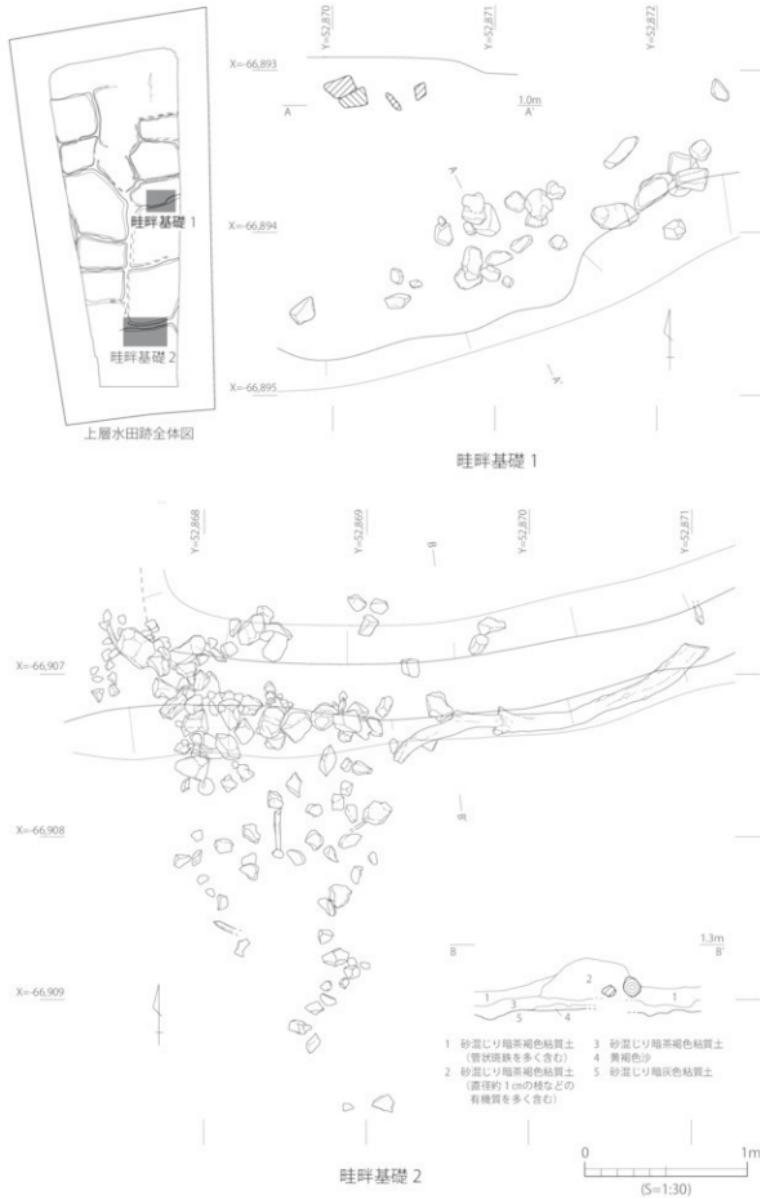
東側の水田区画で10~20cm程度の小規模な落ち込みを多数検出した。埋土は水田面を覆うI



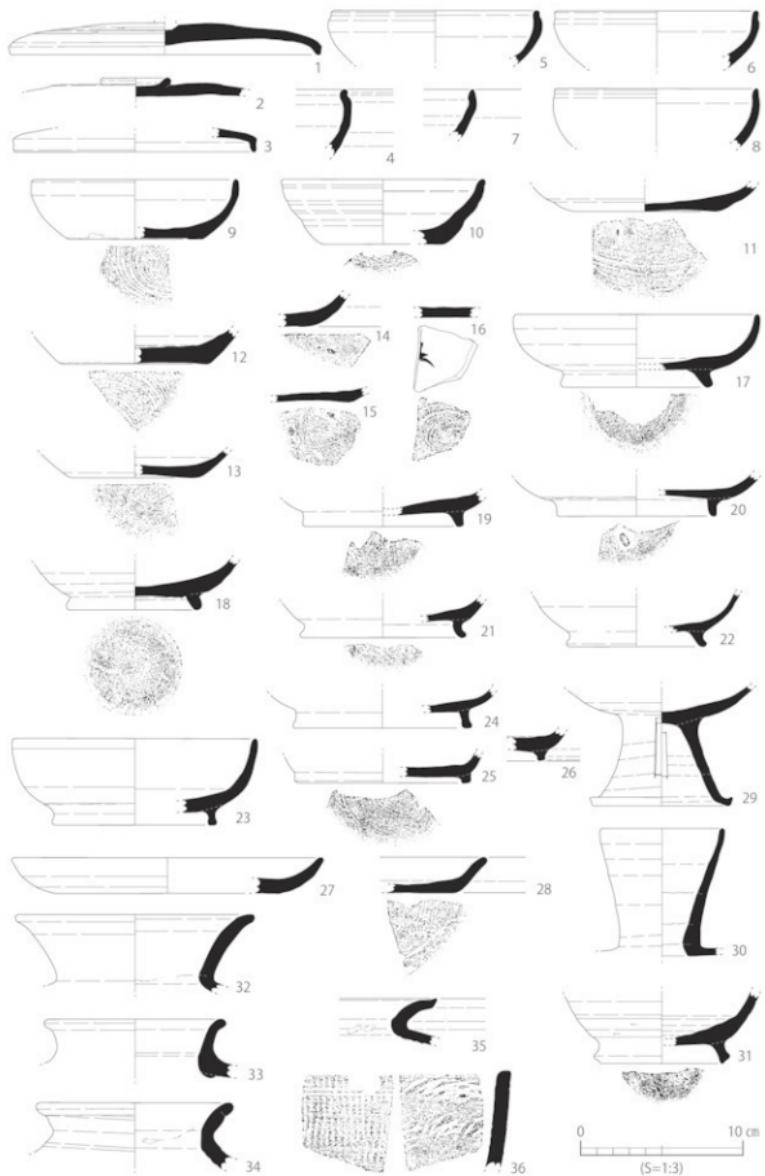
第9図 調査区西壁土層図



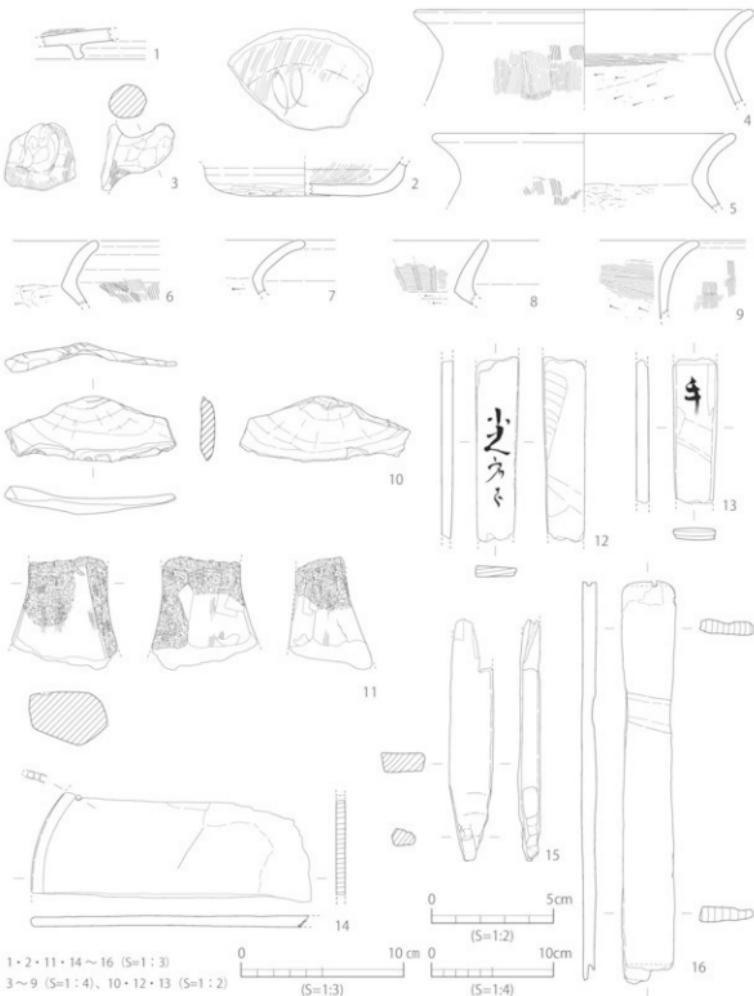
第10図 上層水田跡実測図



第 11 図 上層水田跡畦畔基礎実測図

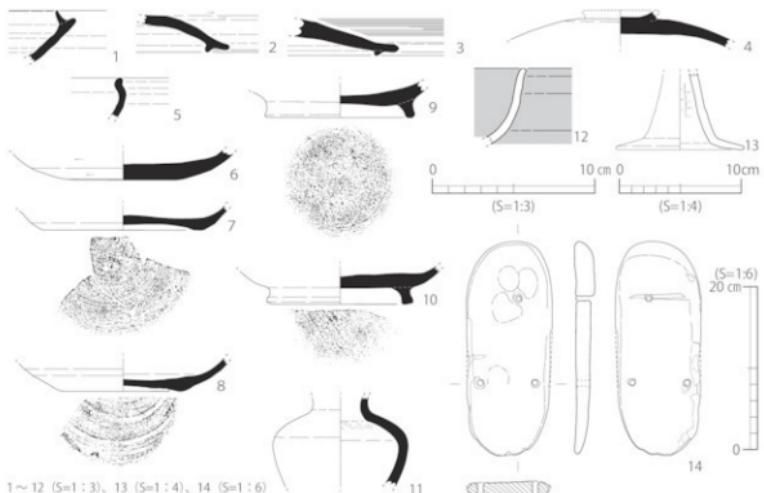


第12図 I層出土遺物実測図(1)



第13図 I層出土遺物実測図(2)

層の砂礫で、平面の輪郭は不明瞭なものが多く、底面の形状も一定しないものがほとんどで、図示したのはその一部である。このうち水田区画i, jでは人の足跡と考えられるものが確認できた(図版16-1, 3)。前者では南北に直線的に並んでいるように見える。水田区画k ~ nの落ち込みも足跡の可能性もあるが形状だけでは判別しがたいものが大半で、耕作面のほか畦畔上にもあり、耕作による凹凸や、水田面を覆った土石流による搅乱の可能性もある。



第14図 II層出土遺物実測図

作土を掘り下げる過程で畦畔の基礎と考えられる遺構を検出した(第11図)。畦畔基礎1は水田kとlを区画する畦畔の基礎で、人頭大の礫約30個が畦の中心部分に長さ3m、幅50cmにわたって、一部で重なるように置かれていた。畦畔基礎2は水田mとnを区画する畦畔で、幹と枝葉側を切断した長さ2m、直径10cmの自然木と10~20cm大の角礫が畦の南側に置かれていた(図版17)。石は畦畔の中で重なるように置かれ、畦畔から水田区画m、nの作土側にも広がっている。

I層出土遺物(第12、13図)は土石流となって谷奥側から砂礫とともに流されてきた遺物である。土師器が401片、須恵器が358片、木製品5点、石製品2点が出土しており、土器片が摩滅していないことから、北側の近い位置に集落が存在したと考えられる。須恵器(第12図 図版23)は古墳時代のものは少なく、奈良時代のものが目立つ。壺の底部は回転糸切り29点、静止糸切り4点で前者が多い。16は回転糸切りの底部外面に墨痕があるが判読できない。土師器(第13図 図版24-1)では1、2が赤彩環で4~9は口縁がくの字に開く彫である。10は安山岩の翼状剥片、11は凝灰岩の砥石である。12は木簡で片面に4文字程度あり、「小□□(九カ)□」と考えられる。裏面は表面削りが施され、両端は欠損している。13も片面に墨書が1字「手」と記されている。14は曲物の底板で綴じ孔がある。15は先端を楔状に削りだした木製品、16は細長い板の中程近くに幅1cmの圧痕状の浅い凹みがある。

II層出土遺物(第14図 図版18-2、25)は上層水田遺構の作土中から出土した遺物で、須恵器83片、土師器44片、木製品1点が出土した。須恵器の壺底部は回転糸切り5点、静止糸切り1点である。壺7、8の底部が回転糸切りで8世紀前葉~中葉が当たられる。14は下駄で指側の孔の位置と使用痕跡から左足側である。

I、II層の出土須恵器の様相に大きな違いは認められず、水田遺構を覆うI層の出土須恵器から、上層水田の埋没時期はおよそ8世紀中頃と考えられる。

### 第3節 中層水田跡

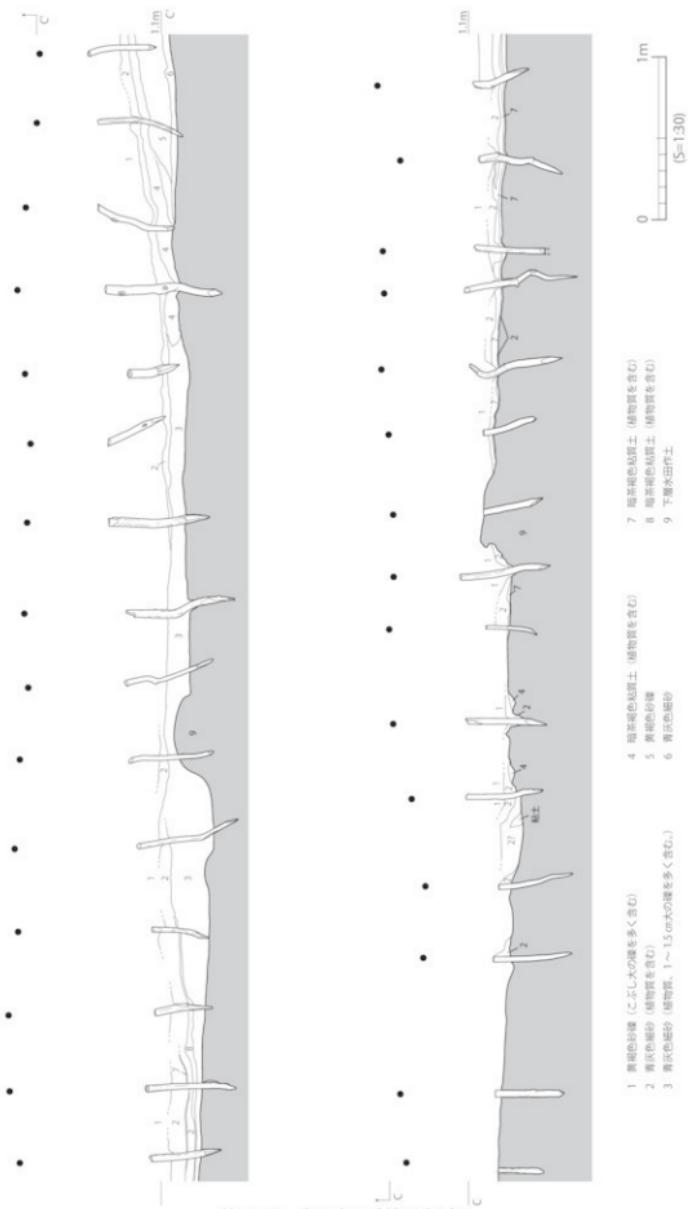
上層水田遺構の作土の下の砂礫層(Ⅲ層)を除去し、作土を確認した(第15図 図版19-1)。西側はⅢ層の砂礫によって削られており平面的には検出できず、土層断面で作土の痕跡に相当する上層の一部を確認した。検出した水田区画は、矩形に曲がる2条の畦畔で、東西方向の畦は幅30cmで断面台形である。南北方向は西から東に下がる段差で区画されている。

水田面の西側で直線的に並ぶ杭列を検出した(第16図 図版20)。N-E°-Wの方向に長さ19.2mにわたり37本の杭が並ぶ。杭上端の間隔は平均47cmで、杭材は直径3cm前後の細い自然木の先端を削ったものである。上端側がほぼ等間隔なのにに対し先端は不規則である(図版19-2)。調査区西際沿いに杭列に平行する3本の杭があり、両者の間隔は3.9mである。畦畔を補強する杭列としては強度が不足し、区画の境界や畦畔盛土の目安等と考えられる。

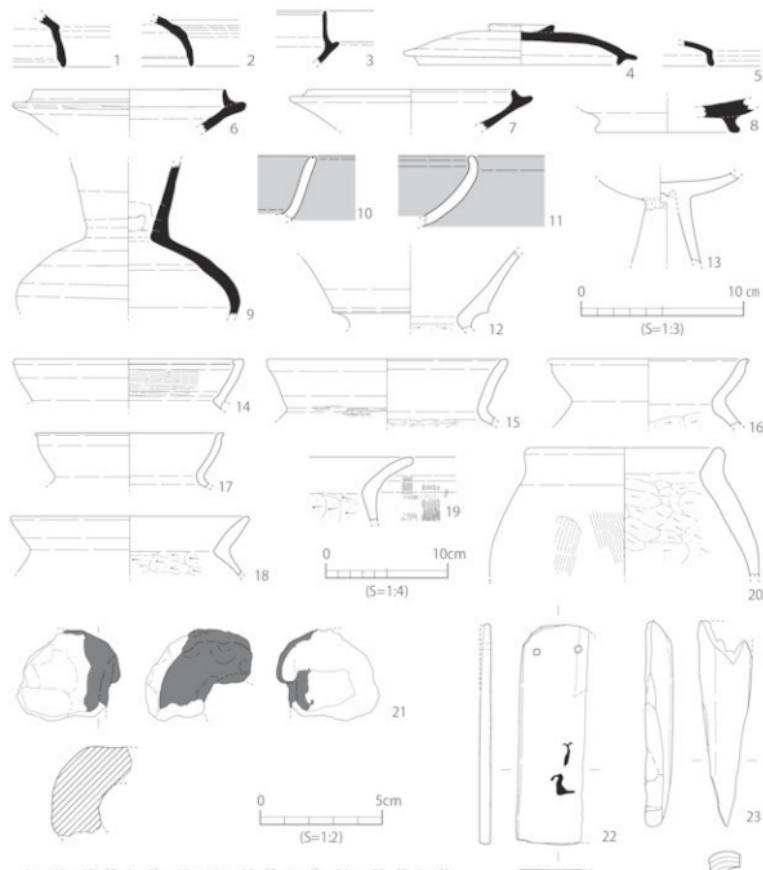
Ⅲ層からは須恵器141片、土師器241片、土製品1点、木製品2点が出土した(第17図 図版25-2、26)。I、II層より古墳時代のものが増えるが、奈良時代の須恵器を含む。21は羽口の先端部分である。22は木筒で、一方を丸く仕上げ2孔を穿ち、片面に「□□古」と記されている。23は先端を削り尖らせた棒状の木製品である。IV層からは須恵器15片、土師器13片、木製品1点が出土した(第18図 図版19-3、25-2、26-1)。須恵器では回転糸切りの環は出土していない。



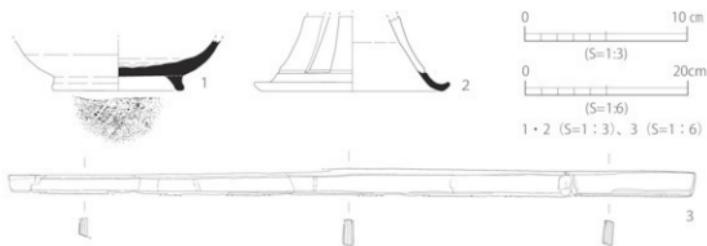
第15図 中層水田跡実測図



第16図 中層水田跡杭列実測図



第17図 III層出土遺物実測図



第18図 IV層出土遺物実測図

## 第4節 下層水田跡

II層及び中層水田の作土の下の砂礫層(V層)を除去して確認した水田遺構である。水田区画はa～jの10枚確認した。区画b、c、e、gは北東～南西方向に縦長に配置され、多角形の区画f、hの南側では区画i、jが東西方向に横長配置となっている。畦畔がT字形やY字形で接続して不整形な区画配置をとっている。

区画の規模は、bが南北6.1m、東西1.9～3.2m、面積14.86m<sup>2</sup>、eが南北8.0～10.0m、東西4.5～5.0m、で面積44.17m<sup>2</sup>、iが南北4.8m、東西8.8m、面積約40.42m<sup>2</sup>である。

田面中央部の標高は、a:1.0m、b:0.95m、c:0.75m、d:1.25m、e:0.95m、f:0.95m、g:0.85m、h:0.85m、i:0.9m、j:0.85mで、北側の区画dが他の区画に比べ1段高い。それより南側はほぼ平坦で、区画a、b、e、f、iに対し東西にやや下がる。北西隅は元の田面から一段低くなってしまっており、土石流によって削り込まれた可能性がある。

作土は基本層序で述べたD層の暗茶褐色の腐植土を基調としており、耕作によって攪拌された結果、微細な砂が多く混入している。耕作は作土



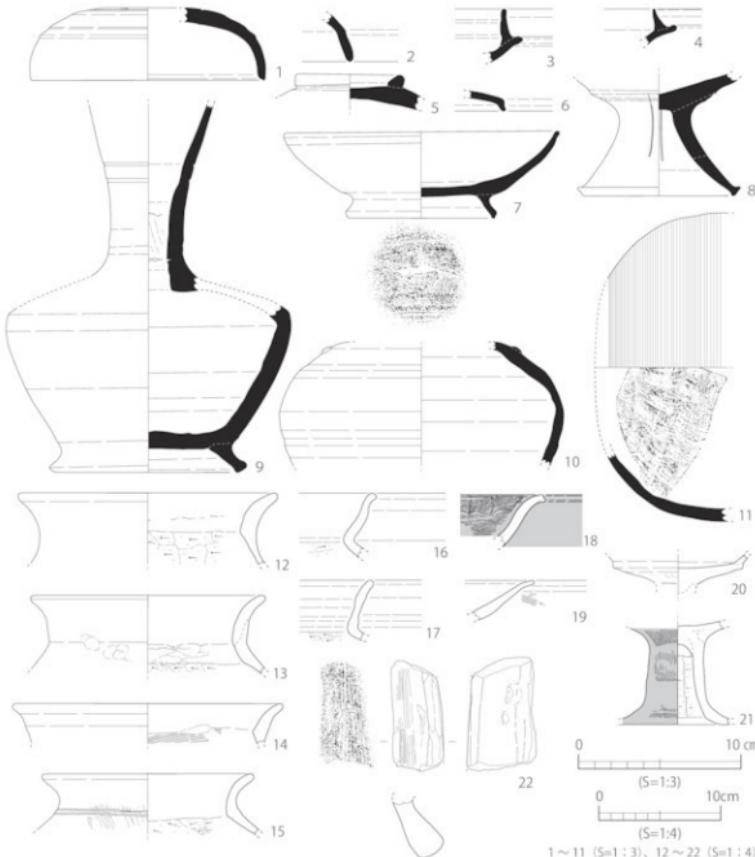
第19図 下層水田跡実測図

上面から 20cm 程度まで及んでいる(図版 7-2)。

畦畔は下幅 30 ~ 100cm、高さ 10 ~ 25cm で、断面形は凸形～台形状である。水口などの導水施設は確認できなかった。

作土面で 10 ~ 20cm 程度の小規模な砂礫の落ち込みを検出した。輪郭は不整形で、畦畔上にもあることから、耕作による擾乱や覆土の砂礫の擾乱の可能性もあり、明確に足跡と断定できるものはなかった。

下層水田遺構を覆う V 層から出土した遺物は須恵器 158 片、土師器 416 片、木製品 4 点である(第 20、21 図 図版 27、28)。須恵器には古墳時代の蓋環のほかに 7 世紀後葉の高台付环 20-7 や 8 世紀前葉の蓋 20-5、6 や長頸壺 20-9 がある。21-1 は板状の木製品で上端中央に 1 ヶ所、中程と下端の両側に円孔が開けられている。裏面は欠損している。2 は辺の角を丸く削った薄い板状の

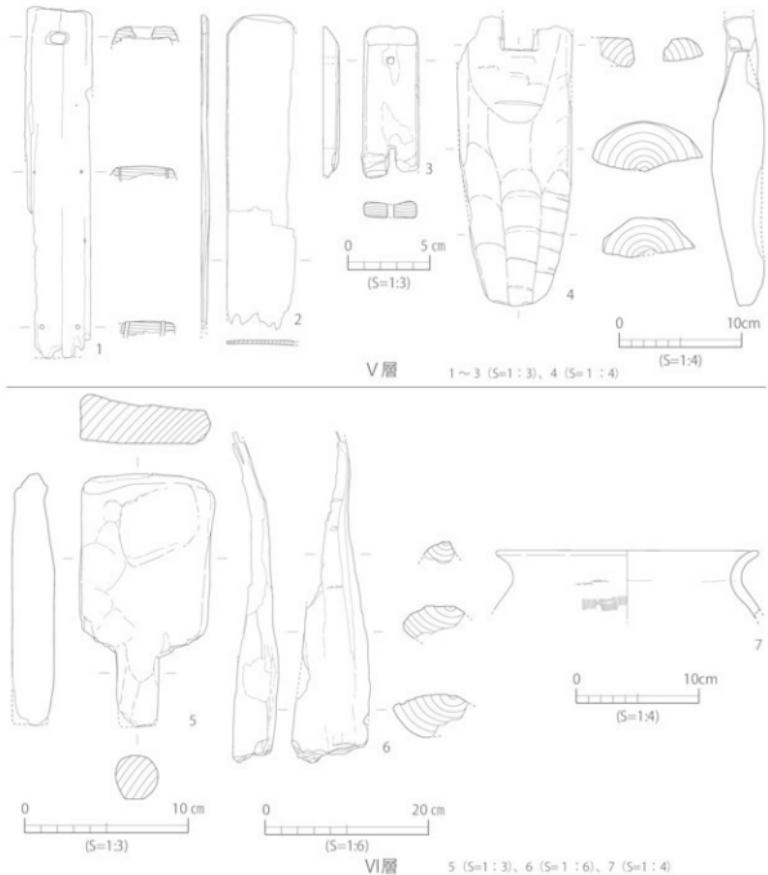


第 20 図 V 層出土遺物実測図

木製品である。3は長方形の小型の板で短辺の両側に円孔があく。一方の端部は鑿刃状に削られている。4は先端を削りだした杭の一部で上方側に矩形の柄孔が穿たれている。

下層水田作土中からは土器は出土しなかった。21-5は羽子板状の木製品である。6は畦下から出土した杭で、下層水田に伴うかどうか不明である。下端は尖らせ切り離したままである。水田作土より下の腐植土層から土師器甕の21-7が出土した。

V層の出土須恵器から下層水田の埋没年代は8世紀前葉で、下層水田の時期はおおよそ古墳時代末～奈良時代前葉と考えられる。



第21図 V、VI層出土遺物実測図

